早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

抑うつ的反すうの能動性と関連する信念

Beliefs Related to Actively Controlled Aspects of Depressive Rumination

２０１２年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
長谷川　晃
HASEGAWA, Akira

研究指導教員：　根建　金男　教授

抑うつ的反すうとは，自己の抑うつ気分・症状や，その状態に陥った原因・結果について消極的に考え続けることを指す。抑うつ的反すうは，抑うつの持続・重症化や大うつ病性障害の発症・再発を促すことが，多くの研究で確認されている。そのため，抑うつ的反すうの持続過程を理解することで，抑うつや大うつ病性障害に対する心理療法を洗練することができると考えられる。抑うつ的反すうの持続は，思考の制御困難性によって大きく規定されている一方，個人の能動性によって促進されている側面もあると考えられている。また，抑うつ的反すうの能動性は，抑うつ的反すうに関するポジティブな信念（反すうする利益に関する信念と反すうしない不利益に関する信念）によって促されていると考えられている。

先行研究では，①抑うつ的反すうを測定する際に精度の低い尺度が用いられている，②本邦において，抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうとの関連性が検討されていない，③抑うつ的反すうと関連性の強い信念の内容が特定されていない，④抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの妥当性を検討する方法に問題点がある，という 4 つの課題が挙げられる。本論文では，大学生を対象とした研究により以上の課題を解決し，抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルを洗練するための知見を得ることを目的とした。

第 1 章では，抑うつ的反すうの特徴や，その悪影響に関する先行研究について概観した。第 2 章では，抑うつ的反すうの制御困難性と能動性に注目した諸理論について概観した上で，それらを統合したモデル（抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデル）を提示した。第 3 章では，先行研究における課題を挙げた。以上を踏まえ，第 4 章では本論文の目的と構成を示した。

第 5 章では，課題①を解決するための 1 つの研究（研究1)を行った。抑うつ的反すうは，日本語版反応スタイル尺度の“否定的考え込み(NR)”で測定した。縦断的調査の結果， NR 得点は 4 週間後に測定された抑うつ傾向を予測した。本研究の結果より， NR は抑うつの重症化を導く反応を測定できていることが確認され，また，抑うつ的反すうという細分化された反応に注目する意義が浮き彫りになった。

第 6 章では，課題②と③を解決するための 3 つの研究を行った。研究 2 では，抑うつ的反すうに関するポジティブな信念尺度(PBDRQ)が作成された。研究 3 では， PBDRQ の各因子得点と NR 得点との関連性を検討するための調査研究を行った。研究 4 では， PBDRQ と，海外で行われた研究で多用されている尺度の日本語版を用いた調査研究を実施した。以上の

結果より，a.本邦でも，抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうとの関連性は認められる，b.先行研究で取り上げられなかった反すうしない不利益に関する信念も抑うつ的反すうと関連する，c.反すうする利益に関する信念については，内容によって信念と抑うつ的反すうとの間の関連性において差が生じる，ということが示唆された。

第7章では，課題③として挙げた，抑うつ的反すうと関連性の強い信念の内容を特定するための更なる検討を行った。研究5では，本邦の抑うつ的反すう傾向の高い大学生10名に対して半構造化面接を実施し，これらの群が強固に保持する信念の内容が探索された。研究6では，抑うつ的反すう傾向高群が保持する信念を細分化して測定できる，反すうする理由尺度（RRI）が作成された。研究7では，RRIとNRを用いた研究を，研究8では，RRIとNRに加え，抑うつ的反すうの持続傾向を反映した課題をも用いた研究を行った。以上の検討により，少なくとも自己記入式尺度で測定された抑うつ的反すうとの関連性では，特に反すうすることが自己や状況の洞察に繋がるという内容の信念や，反すうしない不利益に関する信念が抑うつ的反すうと関連性の強い信念である，ということが示唆された。

第8章では，課題④を解決するための1つの研究を行った。研究9では，抑うつ的反すう傾向高群を対象とした介入研究を実施した。抑うつ的反すうに関するポジティブな信念を反証し，かつ，抑うつ的反すうを導く目標を弱める介入プログラムを受けた実験群は，特別な介入を受けなかった統制群よりNR得点を有意に減少させた。また，NR得点の減少は，反すうすることが自己や状況の洞察に繋がるという内容の信念の確信度の低減と連動していた。以上の知見は抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルを支持するものであり，かつ，このモデルを洗練する上で有用な情報を提供した。

第9章では，本論文全体を通した総括的考察を行った。本論文を構成する各研究では，NRを指標とした場合，抑うつ的反すうに関するポジティブな信念と抑うつ的反すうとの関連性が一貫して示された。ただし，信念の内容によってその関連性の強さは異なり，特に反すうすることが自己や状況の洞察に繋がるという内容の信念が抑うつ的反すうとの関連性が強いことが示唆された。更に，介入研究により，従来の研究とは異なる方法で抑うつ的反すうの能動性を仮定したモデルの妥当性を支持する知見が得られた。以上の知見は抑うつ的反すうの持続過程を理解する際の有用な情報となり，かつ，抑うつ的反すうの持続過程を断ち切るための効果的な介入技法の開発に繋がるものであると考えられた。